

平成27年度 第1回鳥取市総合企画委員会議事概要

- 1 日 時 平成27年5月1日（金）14：00～16：00
- 2 場 所 鳥取市役所 本庁舎6階 全員協議会室
- 3 出席委員 上山弘子委員、岡田一壽委員、岡本洋一委員、尾崎直美副委員長、小野澤弘成委員、小谷文夫委員、下山裕子委員、白岡あゆみ委員、棚田厚委員、谷上雄亮委員、茶谷友士委員、塚田比佳里委員、橋本勝信委員、松本壽恵委員、松本弥生委員、森英俊委員、森原昌人委員、安田晴雄委員長、山根滋子委員
- 4 欠席委員 谷口節次委員、富岡庄一委員、西村賀代委員
- 5 鳥取市 市長、副市長ほか関係部長（局長・次長）、政策企画課、戦略創生室（事務局）

6 開 会（太田政策企画課長）

定刻となりました。ただいまから平成27年度第1回鳥取市総合企画委員会を開会します。

まず、委員の皆様には、本年3月末に書面により御案内していますが、本委員会の委員として、今回から新たに2名の方に加わっていただいております。趣旨としては、本市の総合戦略等の策定に当たり、各分野から御意見を幅広く頂戴したいということで、いわゆる「産学官金労言」と申しますけれども、その中の金融機関及び労働者団体から知見を有する方に加わっていただく構成として、この4月1日付で委員を委嘱させていただきましたので御報告申し上げます。

次に、鳥取市総合企画委員会条例第6条第2項に、委員会は委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができないと規定されております。本日、22名中、19名に御出席いただいております、今回の会議が成立していることを御報告いたします。

なお、本日は、谷口節次委員、富岡庄一委員、西村賀代委員、以上3名につきまして、所用のため御欠席されます。

開会に当たりまして、深澤市長より御挨拶申し上げます。

7 市長あいさつ（深澤市長）

皆さん、こんにちは。市長の深澤でございます。

本日は大変お忙しい中、本年度第1回目であります鳥取市総合企画委員会に御出席をいただきまして、まことにありがとうございます。

御承知のように、今年は地方創生元年というふうに言われており、昨年末、12月27日にまち・ひと・しごと創生本部で総合戦略と長期ビジョン、あわせまして緊急経済対策が閣議決定をされたところです。これに呼応しまして、本市とし

ても、いち早く関係予算を臨時議会、また2月定例会等で計上して、年度が変わり、いろんな取り組みを今進めていこうとしているところです。地方創生ということで、まさに地方自治体の力量がこれから問われると、このように考えておるところです。

このような中、本市においては、鳥取市版の「総合戦略」、「人口ビジョン」を今年の9月あたりを目途にこれから策定していく予定です。多くの市民の皆さんの御意見等もいただきながら、策定を進めようとしているところです。

また、先ほど担当課長より少し触れましたが、国も、あらゆる分野の皆さんから御意見を頂戴して、この総合戦略等を策定するよということ、産学官金労言と、いろんな分野から参画をいただいて、一体となつてというのですか、一丸となつてやるよにと、こんな趣旨の話が国のほうから出ているところです。よということ、このたび、小野澤委員さんと棚田委員さんに参画をいただいたところでございます。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

本市は、来年度から次の総合計画、第10次総合計画がスタートするわけでありまして、これから策定しようとしておりますこの鳥取市版の総合戦略も、総合計画と整合を図りながら、これからその内容を考えていくことになろうかと思っています。

本日は、この人口ビジョンの骨子案と総合戦略の骨子案、あくまでこれは案であります。こういったものを担当課のほうで一応つくりまして、これをもとに委員の皆さんに御議論いただきたいと、このように考えているところです。

どうか忌憚のない御意見等、お願いしたいと思います。簡単ですが、御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いを申し上げます。

8 委員長あいさつ（安田委員長）

5月に入り、クールビズをさせていただいておりますので、ネクタイをお締めの方も、胸襟を開く意味合いでネクタイを外していただいたらありがたいと思っています。

4月2日でしょうか、桜が一斉に開花しまして、私も南栄町で事業を営んでおり、土手沿いで咲いたなよということ、カメラに収めました。その明るくからは暴風雨がひどく、きれいな桜の1日、何か無情を感じた昨今でございますけれども、皆さんはいかががでしょうか。

少し感じるよところを話させていただきたい。何か日本の政治自体がちょっと曲がったよのか、違う方向に行っていないかなと感じるのは私だけでしょうか。

政治的に見てみますと、いつの間にか軍隊というものができて、いつの間にか海外にまで派兵ができるよという話が出てきていますし、経済的に申し上げても、アベノミクス、第3の矢が放たれたにもかかわらず、大企業の方々の、また、大金持ちの株をたくさん持っておられる方々の利益には供しているわけですが、東京から600キロぐらいの鳥取まではなかなか届いてこないわけですよ。

「ふくちゃん券」が唯一の私たちの浅い望みよということ、小さな幸せをいただいたことに対して感謝をする次第です。1人5万円よということ、6万

円から1万円の臨時収入で、さあ、これから何に使おうかなと思っている昨今です。

さて、平成26年5月に日本再興戦略の中でいろんなことがうたわれ、もうこのまま何もしなければ、日本国は2060年に人口が8,500万人になりますと。また、鳥取市は2060年に12万弱になります。私たちはそういう「何もしなければ」という言葉を、逆転をさせていただいて、「今ここでやらなければならない」ことがたくさんあるわけです。人、それから仕事、それから地方、地域、今お集まりの19名の方々が積極的に発言いただき、また、具体的なお考えをお聞きかせさせていただいて、10次総に持っていきたいなと思うわけです。

本日は会議時間を2時間とっています。一言ずつというよりも、二言も三言もいただきたいと思っていますので、それぞれの立場で思いのたけをぶつけていただけたら幸いです。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

9 新任委員の紹介（太田企画調整課長）

議事に入ります前に、新たに臨時委員に御就任いただいた2名の方に、自己紹介を兼ねてそれぞれ一言ずついただけたらと思います。お名前を読み上げますので、よろしく願いいたします。まず、小野澤弘成委員お願いします。

○小野澤委員

皆さん、こんにちは。鳥取銀行ふるさと振興部の小野澤と申します。

当行としましては、1月に地方創生担当部というのをふるさと振興部の中に設置しました。いろんな意見を発しながら、この地方版の総合戦略にお役に立てるような案をどんどん出していきたいと思っていますので、よろしく願いしたいと思えます。

このような会議には出させていただいているのですけれども、金融機関の監督官庁である金融庁も、やはり常に連携と、横の連携ということをしていらっしやいます。金融機関も一緒になって頑張っていきますので、よろしく願いいたします。

○太田企画調整課長

ありがとうございました。続きまして、棚田厚委員お願いします。

○棚田委員

皆さん、こんにちは。連合鳥取東部地協で副議長をしています棚田厚と申します。

先日、4月26日に、千代川原でメーデーも行いまして、特に雇用のことについて、安心・安全社会、これを目指して今取り組んでいるところです。また、連合で今力を入れていることに、「漫然と見ているだけでは問題点というのは見つからないと、意識して見ないと見つからない」ということをスローガンといいますか、意識しながら、私たち自身が本当に見るために何の視点を持つかというところを考えていきたいなと思っています。どうぞ皆様、よろしく願いいたします。

○太田企画調整課長

ありがとうございました。ここで、深澤市長、羽場副市長は退席させていただきます。

10 議 事

○太田企画調整課長

これから議事に入ります。鳥取市総合企画委員会条例第4条第2項の規定によりまして、議長は委員長が務めることとなっています。これ以降の議事の進行は安田委員長へお願いいたします。よろしくお願いいたします。

協議事項①鳥取市人口ビジョン骨子案について

②鳥取市総合戦略骨子案について

③今後のスケジュールについて

○安田委員長

それでは、議事に入ります。次第に沿って進行します。

協議事項①鳥取市人口ビジョン骨子案について、資料ナンバー1-1、資料ナンバー1-2です。それでは、事務局より説明をお願いします。

○事務局説明（塩谷創生戦略室長）

資料に基づき説明（略）

○安田委員長

事務局から説明がございました。この件について、何か御質問がありましたらお受けいたします。

鳥取市においては、シミュレーションA、これをメインにして考えていこうということですのでよろしいですね。

○事務局

はい。

○森原委員

意見も含めて2点質問したいと思います。

一点は合計特殊出生率の目標です。5年後の2020年に1.8、2030年に2.07ということで、目標を設定するのはいいのですが、現状から見て、果たしてこれが可能なのかどうか、私は個人的には悲観的な見方をしています。これの設定値の理由について教えていただきたい。

もう一点は、鳥取市は9つの市町村が合併して大きくなったのですがけれども、この人口推計として、市全体の数字はいいのですが、旧鳥取市と、それから旧町村に分けた数字はどうかと。

といいますのは、旧鳥取市だけ人口の減少率が低くて、周りの町村がぐっと減ってしまっただけでは、均衡ある鳥取市の発展にはつながらないわけで、そのあたり、

やはり旧町村、1町村ずつは難しいとしても、旧気高郡、旧八頭郡、旧岩美郡という分け方でもいいのですけれども、旧郡部の人口の推計も出されたほうがいいのではないかなと思います。この2点です。

○塩谷創生戦略室長

お答えします。合計出生率の1.8、それから2.07というのは、目標であります。これから総合戦略の策定にあたり、その中で少子対策などを含めて、こういった数字を設定しているということです。これについては、鳥取県が県全体の推計を出していますが、それに基づいているという数字であります。ですので、確たる根拠というのはここではお答えできないのですけれども、そういったことで目標の数値ということなのです。

2点目の、旧市・新市域の人口の推移というか、人口を分けて考えたらどうかということですが、鳥取市全体でも下がっており、各旧町村においても人口の推移は下がってきているのが現状です。

減り方がちょっと違うのですが、増減率を平成16年と平成26年で比べると、鳥取市全体では△3.6%です。国府町△0.1%、福部町△11.4%、河原町△11.7%、用瀬町△12.2%、佐治町△21.7%、気高町△8.9%、鹿野町△8.9%、青谷町△17.4%ということで、佐治町や青谷町の減り方が大きいかなというところです。

○安田委員長

国府、河原、用瀬、佐治、青谷、これが全部2桁ということですね。

○谷上委員

資料1-1の政策の基本目標ですが、単純にちょっと気になるなと思って質問です。「次世代の鳥取市を担うひとづくり」ということですが、具体的に言ったらどんな感じなのかなと。ひとづくりといってもいろんな意味合いにとれるなと思ってます。よろしくお願いします。

○安田委員長

資料2にその骨子というのでしょうか、載っているのですよね。資料2を説明していただいてからでいかがでしょうか。

○谷上委員

わかりました。

○安田委員長

その他。なければ、協議事項②鳥取市総合戦略骨子案について。資料2の説明に移りたいと思います。

○事務局説明（塩谷創生戦略室長）

資料に基づき説明（略）

○安田委員長

テーマが大変広範囲に分かれていますので、まず、「次世代の鳥取市を担うひとづくり」このテーマについて皆様から御意見をいただきたいと思います。

「①教育の充実・郷土愛の醸成」、それから「②結婚・出産・子育て支援」という項目についての皆様の立場の上での御意見をいただけたらと思います。それでは、最初に女性を主体にさせていただきまして、女性の委員からお話を伺いたいなど。

○松本(壽恵)委員

教育の立場からといいますか、人づくりというのが次世代の鳥取市を担う大きな柱の一つというのは本当にそのとおりだなと思います。やはり人をつくっていかないことには地域を守ることはできないし、鳥取市を本当に豊かなものにしていくことにはならないだろうと思います。

鳥取県はといいますか、鳥取市もですが、若い世代が都会に出ていく、帰ってくる可能性があるかないかというので、結局子育てをするけれども、出ていってしまうというのが現状だと思うのです。

やはりそこで、どこでも自立できる子供たちを育てていくというのがメインで教育行政は本当に頑張っていると思うのですけれども、そこが鳥取市にいて、鳥取で働いて、鳥取で生活してくれる、そういう人づくりということだろうと思っているのですが、これは大きな経済的なものがないと、鳥取で働こうかとか、鳥取に住もうかという、次のⅡ番、Ⅲ番につながっていかないと思います。最初の充実と郷土愛の醸成というか、そのあたりは本当にいいと思いますが、先ほど説明がありました出生率とか、いろいろ考えていきますと、本当に厳しい状況だなと思います。

結婚しない若者が多い中で、出産、子育て支援ということで、施策的には随分手が入っていると思うのですけれども、施策だけでは人は動いていかないと思います。

例えば婚活サポートセンターをつくっても、何組の方が結婚して、どういうふうに鳥取で暮らしていらっしゃるのかとか、それから、生まれた子供たちの保育サービスの充実、これは本当にそうだと思いますけれども、いろいろやっているけれども、大変というのが現実で、やはり女性の立場からいくと、育休のとれる人が誰もがとれているのかとか、業種によっては、もう結婚、子供ができたらやめなければいけないというところもたくさんあると思います。

やはりそのあたりで仕事を持ったらずっと働いていけるという女性の母親の立場というの、とても子育てには大きな力となっていくと思いますし、何かそのあたりが本当に充実したものにならないければ、苦しいかなと思います。

小学校の現状で見ていくと、やはり教育格差がとても大きくて、ある子供は幾つもの塾にも行けるけれども、ある家庭は給食費もままならないという状況、この中で子供たちはともに育っているわけで、これは全国どこでもそうなのですが、やはりそういう状況の中で、鳥取で本当によかったと思えるような教育行政とか、人づくりというものをしていかなければいけないのではないかなと思っています。物すごく期待するところなのですけれども、というところで。

○安田委員長

大変広範囲にわたって、どなたにぶつけましょうか。育休の問題あたりは痛切な

問題かもしれませんが、それから、経済的な支援。よろしいでしょうか。

○田中企画推進部長

松本委員のおっしゃったことは、言ってみればほぼ全てカバーするような話でありまして、当然単体の施策だけではなく、いろんな「ひとづくり」であったり、「しごとづくり」であったり、「まちづくり」ということで、そういったことを総合的にやっていくのに、この総合戦略、ここに落とし込んでいくということで、大変よくわかって、ありがたい御意見でした。

成婚の話もありましたが、企画推進部が結婚施策を持っています。平成22年度から「出会いの事業」を始めまして、これはいろんなカップル成立とか、イベント助成ということで、なかなか実績が出ていない状況があります。平成22年度から26年度まで200件を超えるカップル数はあるのですが、把握できている成婚は6組ということで、こういったところにも力を入れながらいろんな施策をやっていきたいと思っております。

○安田委員長

こういうことを聞いたのですよね。実を言いますと、私たちが今、南栄町にありますね。団地、鳥取鉄工センターの協同組合に青年部というのがあるんで、そこで婚活のイベントをやりまして、女性が40名、男性が40名のカップルを、テレビではごさいませんが、いろいろ2時間にわたってやって、それで三々五々、終わったらお帰りになるのだけれども、そのカップルができて、それから以降の経緯は個人情報で言えないというのは本当なのでしょうか。

○太田企画調整課長

今まで、出会い事業を補助金の支出ということで実施してきたわけですが、カップルができた後、誰が誰というところまではなかなか教えてもらえないというのが現実だと思います。数だけに関しては、好意的に教えていただけるの分しか把握ができないというのが現状です。それ以前に、追跡調査を実際していない場合が多くて、イベントの事務局のほうに成婚したという報告があれば、そこはつかんでいるということが現状です。

我々としましても、昨年11月に婚活サポートセンターを市と労働者団体とか民間団体と協働して設立をして、いわゆるカップル成立後のアフターフォローも含めて取り組みを進めています。まだカップル数というか、できたばかりなので、すぐに結婚につながるにはまだまだ時間はかかると思いますけれども、このサポートセンターについては、その後も何組成婚につながったときには把握していこうと考えておるところであります。以上です。

○安田委員長

結局、それに対してそれなりのお金を私たちは出しているわけですね。助成金ではなくて、組合の予算の中から10万円という格好で。それで結果がわからないということであれば、次回、やることができないのです。やっぱりPDCAのサイクルの中でやっていかないとだめなのにもかかわらず、わからないというのもおかしい話でして、ここらあたりはちょっとまた勉強させてください。

○山根委員

鳥取市は子育てするにはとてもいい環境で、保育所も待機の子供たちもありませんし、とても環境がいいと思います。何ができない・できないばかりではなくて、優れているところをどんどんPRして、そういうことを前面に出して、もっと明るく楽しい雰囲気です。いろいろなことを計画していったら、随分とよくなるのではないのかなと思います。

○安田委員長

わかりました。鳥取市の市報でもっとPRしろということですが、県だよりとか市報で。いい面もどんどんやっていこうということですね。確かに経済が疲弊してどうのこうのという会話よりは、前向きな会話のほうがありがたいですね。

○塚田委員

「ひとづくり」にはなかなか予算がつかないなというのが今までずっといろいろな活動をしてきて思うことです。行政は単年度で予算を組まれるので、ひとづくりで、今の婚活で何組できましたというのでもやっぱり数で評価をされる。子育ての会をしても、何百人来ましたということで評価されてしまうと。

実際のところ、どこまでその会の趣旨がその人たちに伝わって、それがどう生きてきたかというのはなかなか数字には表れないものですし、とても難しい問題だなと思います。ですので、どういう施策をされるかというのが、今具体的に思い浮かばないのですが、すごく関心があります。

今、学校でも特に高校生とか進路を決めるときに、キャリア教育というのをとても重点を置きます。進学をするにしてもいずれは就職をするわけで、その就職がすごく厳しい時代から、今は割と数としては就職しやすくなったということがあるのですが、3年もたたずにやめてしまう。本当に自分は何を仕事としていきたいのか、そういうふうにしたときに、やっぱり小さいころからその人がどう育ってきて、例えば鳥取に帰って就職しようと、「そうだ、島根に帰ろう」のコーナーを皆さん見ておられると思うのですが、小さいときから大人たちが鳥取で楽しそうに暮らしているか、おいしいものを食べているかということをお子たちに伝えているか。

砂丘にしても、遠足では行くのですが、私はすごくマイナスのイメージが強くて、それを今は少し下火になりましたが、砂丘を舞台にして子供たち、小学生、中学生、高校生と一緒にキャンプをしたりして、砂丘はすごくおもしろいのだよということを伝えてきました。学校教育の場でなかなか地元のよさを伝えていくというのは、それ以外のことが多過ぎて難しい。

学校の先生も砂丘のことをよく知らない、鳥取市民に聞いても、「砂丘、うん、広い砂場」みたいな返事だったりして、やっぱりその地域のよさというのを一人一人の大人がどう伝えていけるか、それが施策になっていけるのかなというのはあります。

それから、中高生のときに、地域のリーダーとして、祭りがあるところはいいいのですが、やはり新興住宅地が鳥取旧市内でも多いところは、地域のつながりがない。早く都会に出て働きたいとか、東京の大学に行って頑張りたいみたいな感じで、鳥取で暮らすことの金銭的なものとか、精神的なもの、いろいろなものと、そ

れから東京で住んでお金をもらうのだけれども、それで子育てをずっとしていけるかということ客観的に比較したファイナンシャルプランナーのような方の話を聞くと、鳥取がいいよということになるのですが、そういう情報もなく、皆さん、出たら帰ってこない。

まともらないですけれども、その辺のところで人づくりというのはとても大きな問題ですので、そこをやっぱりみんなが考えていかないと帰ってこないと思います。

○安田委員長

そうですね。人づくりと教育について、よろしいですか。はい、岡田さん。

○岡田委員

お尋ねを初めにしますが、新聞で今年の県外大学進学率の中で、鳥取県はトップではないかという情報があったように思うのです。県外の大学に行く人口比で、鳥取県はトップではないかと。本当だろうかと僕は心配しているのですが、いい意味もあると思うのです、学力も高いということで。しかし、本当に鳥取県がトップというのは、この人口比からして、また、帰ってきて就職、いろいろ考えると、恐らく多くの子供が帰ってこないだろうと思います。

それから2つ目、今祭りのことが出ましたが、実は私は地域のまちづくりの会長もしているのですけれども、先般、氏子の神社の祭りということで、今年あたりでは頑張ろうとと言いましたら、子供が少ない関係もあるのですが、お父さん、お母さん方が忙しいから、やめたと言われるのです。頼むから協力してと、もう今年出なかったら、次は出られないのだよと言っても、いいですと言われる。

今これから、今ふるさと、思い出、もう二度と小学校1年生、2年生、6年はないのだと。今屋台で踊ったという思い出を残そうと、頼むでと頭を下げて、何とか頑張ろうとと言って、今日も6時ごろから練習をするのですけれども。

そういった状況と同時に、僕が町内会長から宿題をもらっているのは、子供会が3月の末に、うちの地区、修立地区が解散したというのです。大問題なのです。僕は知らなかった。それを聞いたものですから、この間の4月の町内会長会でいろいろ、自治会長もしているもので、話をしましたら、えらいことだと。会長、おまえの責任で再建しろと、頑張りますとあって、これから宿題、頑張るわけです。

今一つ市にお願いがあるのは、国のいわゆる公益法人の評議員をしているわけですけれども、県あたりで少年団体の表彰関係で表彰があります。ところが、鳥取市では表彰はどうなっているのですかと必ず聞かれる。鳥取市は文化とか体育では表彰が具体的にあるのですが、子供会の育成で頑張ったということで、最近鳥取市から表彰を受けられたという人はいないのです。子供を育てる、子供は大事な財産だという言葉はたくさんあるのですけれども、これから我々の将来を託したいと思っておる子供たちの、本当にジグで泥んこになって世話をしておられるおじいさん、おばあさん、中年の人を、御苦労さんでした、これはやはり私としてはしてほしいと思います。以上です。

○安田委員長

表彰しないとだめではないかと言われてはいますが、いかがですか。

○岡田委員

いや、だめというより、気持ちが欲しいです。

○安田委員長

子供会に対して、どうでしょうか、どなたか、そういう評価をなさっているところというか。社会福祉協議会の岡本委員。

○岡本委員

子供会連合会の事務局も預かっています。実際、今おっしゃっておられましたように、子供会の加入が非常に少なくなってきました。あるいは世話をされる方がいなくなったので解散しますとか。これは子供会だけではなくて、それぞれの当事者団体全てに共通した問題です。

老人クラブ等につきましても、実は単位クラブを解散しますとか。その大きな理由が活動に対して反対だから解散するとかではなくて、世話をされる方がいらっしやらないと。まさにこの人づくりが大切な大きな要素であるだろうなど。誰かがお世話をする、それを継続的につないでいくと、そういった体制が整っていけば、少ないながらも組織そのものは継続されるのかなど。そして、それぞれの時代に合った活動展開もできれば、魅力的な活動展開につながっていくのかなど思っております。

おっしゃられるとおり、子供会の役員さんを表彰云々は全く別にしても、地域の中で次の世代を担う子供をどうやって育てていくかというのが地域の中で一緒になって育成者、指導者、世話係、こういった方をつないでいくというのが最も大切なことではないかなと思います。

私も、全体の中で、3つの目標がありますけれども、この3つの目標それぞれで考えても、なかなか実現しない、あるいは現実性がない部分があるのではないかなと思います。3つが全て連動していると。どれか一つが欠けても、例えばひとづくりであっても、地域にそういった方々が住んでいただかないことには、ひとづくりもままならない。

あるいは、住んでいただくためには、仕事がないとなかなか住んでいただくことができないと。先ほど転出の人口減少の佐治、青谷が減っていると非常に大きな数字が出ておりましたけれども、この実態が県外に出られたのか、あるいは旧鳥取市内に転居されたのか、それらの内容も相当違ってくるのではないかなど。

実際知っている中でも、佐治や青谷の方が旧市内に転居されましたと。ですから、そこから人口が移動されただけであって、鳥取市の人口減少の歯どめがかかっているのではなくて、山間地域から転居されたという実態もあるのかなと思います。

抽象的で非常にわかりにくいかも知れませんが、「鶏が先か卵が先か」の問題があると思いますが、でも、この3つの柱のどれが欠けても目標達成には大きく影響してくるということがあります。

一つだけお願いしたいのは、非常に鳥取市は大きな行政区域です。それぞれの地域でそれぞれの特有の課題があろうかと思えます。そういった観点から、鳥取

市全体で大きな柱を立てて、具体的な施策を検討するだけではなくて、本当の意味での、小地域でのこの3つの柱をどのような形で実現していくかというのをそれぞれの小地域の中で検討していただいて、そこから上がってきたものが鳥取市全体の大きな基本目標という形になっていくのが一番わかりやすく、住民の方々も参加しやすい具体的な対策になっていくのではないかと思います。たくさん申し上げましたが。

○安田委員長

ありがとうございました。

「ひと・しごと・まち」という3つテーマ、これもうほとんど三位一体だと私自身は思っていますし、多分間違いなく皆様方も思っておられると思います。ただし、特に重要なのは何かということをやっぴりこの中で協議をさせていただきたいなと思います。私自身は、やっぱり「ひとづくり」をメインに考えなければならぬのかなと思っていますが、これを今後、第2回、第3回、多分9月までそんなに時間はございませんけれども、テーマを掘り下げてやらせていただけたらと思っています。

先ほどの転居の云々の話がございましたが、それをちょっと教えてもらいましょう。

○田中企画推進部長

まず、岡田委員が最初に大学の進学の関係でおっしゃいまして、1位かどうかわかりませんが、当然転出する率はかなり高いです。鳥取大学にしても、鳥取環境大学にしても、県内からの学生というのは2割を満たしていないので、かなりの学生さんが出られている。今回の総合戦略で、総務省の施策にもこれに関連したものがあまして、やはり地元で進学をしてもらおうと。それがやはり地元に残っていただくのは、数字的にもこれは多いのでということで、我々もそういったところの認識を踏まえながら、そういう取り組みを、また大学とも協定を結ぶとか、そういったことをして取り組みたいと思っています。

転居について。人口ビジョンの骨子案のなかで、先ほど森原委員もおっしゃいましたが、この市の中で実際にどういった移動形態、自然増減、社会増減がありますので、そこはもっと細かい分析をこれから専門の力も借りてやりたいと思っています。また、特に佐治あたりがどうしても減少率が高い、もともと合併以前から高齢化がかなり進んでいた関係がありまして、外に出るというよりも、やはり社会的、自然減で減ってくる率が高いというデータもありますので、できればこういったものも次回以降にお示ししながら、意見をいただければと思っています。

○安田委員長

岡本委員がおっしゃったように、非常に気になる数字ですので、転入、転居、いわゆる市内に入られたのか、県外に出られたのかというところを少し開示していただけたらと思います。よろしいでしょうか。

○田中企画推進部長

そこは単純なデータがありますので、それはまたまとめまして、お示しできれ

ばと思っております。

○安田委員長

ありがとうございます。

○松本(弥生)委員

40年ぐらい地域のことにいろいろと子供のころから参加させていただいて、地域のことに参加することは当たり前だと思って今まで大きくなってきました。現在もうちの子には地域のことはなるべく参加するようには言っているのですが、保護者のほうの感覚が違ってきているみたいで、まず、第一に保護者の用事が1番、その次に、あなたたち、学校の行事ではなくて、部活が2番、そして、その後にはほかの事業があって、最後に、時間の都合がいたら地域の行事という格好の順番があるみたいで……。何か優先順位的には、私個人がほかの子供さんとか、ほかの保護者の方の意見を聞いていて感じることです。

小学校の頃は、地域とのかかわりをといて、芋植えだったり、田植えだったり、いろいろと接点があって、まち行く人に声をかけるということをやっているのです。しかし、中学校になってくると、人数が少ないから強制的に部活に入って、朝から晩まで部活、おまえは一体いつ寝るのだ、勉強するのだという状況で、多分どこの中学校もそうだと思うのですが、人数が少ないから部活を強制的にやって、嫌々でもどれかに入らなければいけないから、地域のことなんかに出ている暇がないのです。

そうすると、せっかく小学校のときに地域の人とかかわってきているのに、そういうのが全部遮断されて、なおかつ、高校に行くと、もっと自分のテリトリーが広がるといいますか、子供も行動範囲が広がるので、地域からどんどん離れていくと思うのです。なので、もう少し中学校のときに地域にかかわるようなことを推奨していただくといいのではないかと常日ごろから思います。

幸いにして、多分どこの4年生もだと思えますが、地域のことについて1年間通して学習していると思うのです。それが全く生かされていないというか、親も意識が薄くなったというのがあります。地域とかかわると面倒くさいとか、何か出ていったら役をやられそうという、そういう意識のほうに先に立ってしまって、出るのだったら子供だけ出て、私は出たくないからとか、そういう意見をやっぱり地域のほうの役をさせていただいていると聞くことが多い。現在、こうやっていると、常にか高町には3人ぐらいしかいないのではないかという会合になっているような気がします。

○安田委員長

わかりました。教育委員会さん、今ちらっと教育制度の御希望も来たのですが、いかがでしょうか。

○尾室教育委員会事務局長

おっしゃることも多分多々あるのかなと思いますが、教育委員会としても、中学校の部活等についても、なるべく連続してやらないように、休みをとるような形での指導マニュアルといいますか、そういった方向での指導は行っているとこ

ろでです。

また、そういった地域の行事、それから保護者を含めて、地域を大切にする活動、これに積極的に参加するようという投げかけはずっとしているのですが、実態としてそのような形で、それぞれ部活に一生懸命だったり、勉強に一生懸命だったりという諸事情があって、実態としてはなかなか地域のほうに参加できないのかなと思っています。

今後、その辺も我々としても、これからやはり学校教育、これを推進していくに当たっては、どうしてもこれから地域、家庭の力をかりなければならないというところを十分承知していますので、今年度からは特に社会教育、家庭、それから地域、こういったものの力をお借りするような、そういった施策をもうちょっと重点的に取り組んでいきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いします。

○白岡委員

私はまだ子供が1人であり、幼稚園で小学校には上がっていないため、しっかり地域に溶け込んで活動ということもまだできていない状況です。少しふわふわとしたような意見になってしまうかもしれませんが、日本全国的に見ていても、子供たちが公教育になじめなくて、不登校になってしまう子も一部あると思うのです。そういう子たちの受け皿として、インディペンデントな教育機関というか、例えば智頭町にあるサドベリースクールとか、そういうものがこれから民間から自然発生的に出てくるのではないかなと私は個人的には思うのですが、そういう公教育になじめない子供たちの受け皿になっている教育機関、教育機関という名前をつけるのかわかりませんが、そういうところにも、同じ子供を育てているという視点で、しっかりというか、同じようなサポートを行政のほうでしていただければなという声を少し聞いたりしているのです、それだけちょっとお伝えしておきたい。

もう一つ、子供が外に一回出ていくと戻ってこないという話があったのですが、私も山村で育って、東京に出て行って、また田舎、鳥取に戻ってきたという経緯で、自分のことで何ですが、やっぱり大人とか、行政とか、いろんなそういうものにお膳立てされた場所ではなくて、子供が自分自身で場所とかかわるような、1対1のかかわりがその場所というか、例えば川だったり山だったり、まちのどこかだったりという、場所との何か濃密なつながりがあると、もちろん人とのつながりも人を戻す力にもなるのです。

場所とのつながりというのもすごく重要だなということを私自身の経験ですごく思っています、というところからいうと、今子供が例えば一人で外に、山に遊びに行く、川に遊びに行くとなったときに、危ないからやめなさいみたいなことが第一にあって、特にそうやって自然から子供を遠ざける、一人で行動することをできるだけなくすという傾向にあるのですが、できるだけそういう余白をあえてつくるような何か工夫ができれば、もっと場所に子供というか、人が愛着を持てるのではないかなという気がします。

もう一つ、経済で競争すると、やっぱり大きな都市に子供は、経済という意味で考えると、都市に出ていきたくなるのですが、それ以外に、ブータンという国

は経済的には貧しいけれども、国民の幸福度はすごく高いということがあるように、もっと経済以外の豊かさというのをもし行政という形で何か打ち立てられたらすごく個人的かなと思いました。

○安田委員長

ありがとうございました。

○下山委員

まだ結婚とか考えたことがないので、自分が大きくなって結婚したらと考えていたのですが、私は鳥取出身ではないので、まだ1年ぐらいしか住んでいないから、何も言えないのです。

自分の地域のことを考えると、私には10歳下の妹がいて、その子のときの地域のお祭りのことと、私が子供だったときの地域の行事を考えると、地域の行事はすごく少なくなっていて、だんじりも私の時代にはあったけれども、妹の時代にはなくなったりしていて、地域のコミュニティが希薄化しているのを感じています。多分それは鳥取でも同じことだなと思っていて、地域のコミュニティが薄れると、震災などのときに誰がいないとか、そういうのがわからないから、そういうのにも問題になってくると思います。

一つ質問ですが、「次世代の鳥取市を担うひとづくり」と赤い字で書いてあって、将来を担う若い世代と書いてあるのですが、これは鳥取市出身の人のことを言っているのか、それとも、私みたいにほかの県から大学で鳥取に来て、でも鳥取に就職したいみたいな若い、住んでいる若い世代のことを言っているのか、どっちなのかなと思って。

○安田委員長

大事なものは、よそ者、若者、それから女子、これを捨てるまちは絶対にまちのたたずまいはなくなります。だから、これは皆様方の話なので、特定の個人ではございませんし、鳥取も関係ありません。一般的な若い人たち、いわゆる次世代を担う、将来を担う青年たちという解釈でやりませんか。

○下山委員

では、将来を担う若い世代ということで、大学、私の大学にも他県からいっぱい来ているというか、周りの子がほとんど鳥取県以外の子なのですが、そういう子たちと話すと、ツイッターとかでは地元の岡山市に住んでいる子はすごく楽しそうなのに、鳥取だからな、楽しくないなみたいな声を多々聞くことがあるのです。

でも、私は鳥取が好きで、その理由は、海とか海岸とか散歩したり、ちょっと山道を歩いたりするのがすごく気持ちよくて、砂丘も好きだし。でも、自転車でしか行ける範囲がないから、そういう交通の面をもう少しよくしたら、大学生も鳥取県内をうろちょろ回れて、鳥取はいいところだなと思って、ここでもう住みたいなと思えるようになるのではないかなと思いました。

さっきのお話で、鳥取県から出ていく人が多いという話があったのですが、鳥取に来る人、鳥取大学、鳥取環境大学に来る人も、少ないですがいるので、その人たちを鳥取で就職して、鳥取に定住させるような仕組みももう少し考えたらいいのではないかなと思いました。以上です。

○安田委員長

痛切にそれを思います。下山委員のおっしゃるとおり。いかがでしょうか、市の職員の方々、そういうものに対する何か具体的な取り組みみたいな。例えば下山委員が鳥取の地元の若い人たちと仲よくなって、そしたらアクセスも彼がアッシ一君になって、いろんなところに連れていってくれるので、早くそういう出会いの場所を、学校以外のところにも必要ではないかなという気がします。どうでしょうか。また急に振ったので。

○田中企画推進部長

何と答えていいかわかりませんが、県外からたくさんいらっしゃって、そういった学生さんが就職して鳥取に残っていただきたいという気持ちは当然我々も持っています、そのために企業誘致なり、地場産業の振興はやっています。

そこをもっと強力にやりたいのと、やはり今、下山委員がおっしゃったような、どういう考え方を持っておられるかというところも、この戦略をつくる上で非常に大事なので、また個別具体的に学生さんとの意見交換もしていきたいと思っています。

出会いの場とか、いろんな異業種交流でもないですが、そういったところはどんどんやっていただければなと思うので、市のほうも実は若者会議というのを何年前からつくってまして、これは社会人の方もおられますし、鳥大の方も、鳥取環境大学の方もおられて、一つのちょっとしたコミュニケーションをする場みたいにはなっているのですが、それに捉われずに、いろんなところに出かけて行って、部活もさることながら、そういったことをどんどんやっていただければなと思います。

○上山委員

私の地域は福部町なのですが、今、幼・小・中の一貫校づくりということで、町全体で動いているところです。その中で、小・中の連携、連結というのは何となく湖南があったり、若桜学園があったり、かなりの数の一貫校があるので、イメージ的には湧きやすいのですが、さて、幼稚園をどうしようといったときに、今まで見たことのない学校をつくらないといけないというところで一生懸命、今頑張っているところです。

その中で、保護者さん、幼稚園に通っている保護者さんの意向としては、今ここの4月1日から早朝7時から保育園、幼稚園、見てもらえるようになったそうです。ですので、7時から誰かに見てもらわないと、それから延長保育もしてもらわないと、休日保育もしてもらわないと、それができないのだったらその幼稚園には行かせませんという。さっきもありましたが、保護者の都合なのです。私たちは15の春を見据えてどういった子供たち、地域を愛していて、さっきから話がありますけれども、福部町で、そして鳥取市で頑張ってくれる子供たちを育てたい、その一環として幼稚園は、まず保育ではなくて、幼稚園としての教育ができる場でありたいというところで、今、幼保のこども園というのがありますけれども、そこをあえてばらして、幼稚園は小学校と中学校と同じところで一緒に教育していくのだというスタンスで今進んでいるところですがやはりそこでネ

ックになるのが保護者さんのそういう考え方。

子供たちをどういう子供たちにしたいかという、こんな子供たちに育ててほしいというところではなくて、保護者さんが仕事をするに当たって絶対に保育をしてもらわないと、朝7時から見てもらわないと、もうここには預けないからねという、何かちょっとスタートが違うなというところを今切実に思っているところです。そのこのところで、子育てのサポートというところで、その辺で何か支援をしていただけるのであれば非常にありがたいなとも思っていますけれども、最終的に無理だと言われれば、地域のお子さんのちょっと元気なおじいちゃん、おばあちゃんのボランティアを募ってでも朝は見てもらわないといけないのかなというところを今考えているところ、話し合いをしているところです。

それから、実はうちの娘が鳥大に行きまして、この春、卒業しましたが、鳥取市ではないですが、鳥取県内におります。松崎町という小さいところですが、実は大学におるときからそちらのほうに住んでいて、そのまちがすごく好きだったのです。まちの人たちがみんな一つになってお祭りを盛り上げていこうとか、こういう新しい取り組みをしていこうという、そのまち全体の姿勢とか、皆さんの思いの中に触れることができ、ここに住みたいという。

仕事がないからどうしようとか、お金がもらえるのが少ないからどうしようではなくて、その場所が好きだから、そのまちが好きだから、ここに住みたい。では、そこに住むに当たって仕事はどうしようという、プライオリティー1番がそのまちが好きということでした。なので、鳥取市であっても、やっぱりここが好きだから頑張りたいという子供たちを、今は少ないかもしれないけれども、そういう子供たちを育てたい。そのためには、先ほどもありましたけれども、中学校での地域とのかかわりをもうちょっと強くしてほしいとか、小学校であってももっと地域の人が入ってくれたらいいのになという、そういうところを今期待しているところです。

鳥取市としても相談すれば鳥取市版のコミュニティースクールですか、地域の方が経営、企画のほうにも入ってくるような、そういう新しい学校づくりを目指していらっしゃるので、その辺のところも非常に期待しながら、子供たちがこのまちで頑張ろうと思える、そういう子供たちに育てたいなと今思っているところです。特に意見というわけではありませんので、思いだけをとってください。

○安田委員長

ありがとうございます。子育て支援の関係、よろしくお願いします。

○下田健康・子育て推進局長

福部の件ですけれども、保護者の都合の中でも、遊びとか自分のやりたいことを優先というのではなく、今回仕事との両立での都合ですので、やはり保育園での朝7時に預けて、それから仕事が終わってからお迎えに行きたい、延長保育というのはどこでも保護者のニーズとして我々はサポートしていかなければいけないと思っていますので、その辺も御理解をされた上で、地域のほうで話し合っただけならなと思います。

○上山委員

もちろん仕事の都合というのもありますけれども、本来であれば、小学校のお兄さん、お姉さん、1年生、2年生と一緒にバスに乗って通わせてやろうとか、それから、地域で一緒にバスが来るまで待つ間、年上のお兄さん、お姉さんのおうちにちょっと10分ほどおらせてもらおうかという、そういう地域を頼りにするようなところがはっきり言って全くない状態です。

昔は子供たちをバスに乗せる、そのためには子供たちにこうだよねと言いながら、バスに一回一緒に乗ったりして、子供たちの自立を促す部分もあったのですが、今は全くそういうところが見えない。今の保護者の全部が悪いと言っているわけではありませんが、全体的に何かそういうところが見えたり、それから、保育園であっても、土曜日、明らかにこの服装はお休みの日の服装だなという保護者さんが当たり前のように子供を保育園に預けに来て、子供を預けてしまえば自分たちの自由な時間があるということがあるのですよね、実際のところは。

その辺のところの保護者さんをどういうふうに変えていけるかというのが非常に難しく、人づくりというのは、どこを切り取ってみても必要な人づくりというのはあるのですが、どこがそれこそスタートではなくて、本当に卵と鶏以上にもっと深いものがあると思っています。

○安田委員長

わかりました。親の教育から考えなければいけないですね。よろしいでしょうか。今結構これに対して時間をかけたわけでありまして、大体1時間足らなくなるのですが、I番、次世代の鳥取市を担うひとつづくりについて、総括といたらおかしいですけども、尾崎副委員長のほうからちょっと一言。

○尾崎副委員長

今お話を聞かせていただきまして、我が国府町稲葉丘はすごくいいことをやっているなということで、ちょっと紹介をさせていただきます。

というのが、今年の1年生が11名、稲葉丘の集落です。去年が13名で、宮ノ下の小学校、去年の1年生が69名ということで、クラスが増になっています。それから、うちの稲葉丘では、息子の世代がみんな帰ってきています。相当珍しいと。我が息子も帰ってきているので、西町に住んでも、どこに住んでもと親は言って、岩倉の辺に空き地があるしみたいなことを言っていたのですが、稲葉丘がいい、宮ノ下がいい、国府中学校がいいということで、同じ世代がたくさん帰ってきていまして、子供たちが帰ってくると、じいさん、ばあさんがちゃんと声をかけます。

すごくいい感じで、祭りのことがありましたけれども、宇倍神社の子供みこしは、みんなが大勢で引きます。結構頑張っています。それから、ずっと代々、私の息子たちのときからやっているのが、稲葉丘だけの運動会というのがずっと脈々と今もやっています、ことしも行われるのですが、本当に老いも若きも子供会もみんなこぞって出てきます。

多分うまくいっているのは、新しく入ってこられた人もあるのですが、自分たちの小学校のときの楽しい思い出というのが多分あって、一緒にあんなこともしたいというのがあるみたいで、地びき網に行ったり、結構そんなこともやっている

ので、何がよかったのだらうと思うのですが、中学校のときに結構地域と連携があったような気がしますし、ですから、すごく特殊な例だと思うのです。息子たちのときには、稲葉丘、同じ年代、6、7人しかいなかったのが孫の代になると13人というか、倍になっているという特殊な例だと思うので、そのあたり解明して、私は理由がわからないのですけれども、うまくいっているところをちょっとしていただくと、何でいいのかというのが、構造がわかってくるのではないかなと思います。

私自身は、余り町内会のことは積極的ではないのですが、飲み会は全部100%参加みたいなところは、そういう感じではしています。

それからもう一つ、鳥取市少年少女合唱団というところを指導しているのですが、そこの子供たちが一旦外に出て、大学に出るのですけれども、結局帰ってきています。医療関係のほうに帰ってきていたり、保育園の保育士さんになったりとか、そういうのもあって、何か楽しいところというか、いい思い出ができると、ひょっとしたら帰ってくるができるのかなという感じもありますので、周りを見ていると、結構恵まれているのかなという、結果、安全・安心ということで、Ⅲ番の賑わいにあふれ安心して暮らせるまちづくりというのもひっかかるということで、ちょっと参考までにということで紹介させていただきました。

○安田委員長

いい例を言っていただきました。どこのまちでもみんながやっぱりそういうふうにならなければならないのかなと感じたわけです。

ひとまず、この件に関してはよろしいでしょうか。どうしてもこれだけは話したいとおっしゃる方がいらっしゃったら。よろしいでしょうか。谷上さん。

○谷上委員

佐治町のほうは、鳥取市の中でも青年団のほうは今できております。そういった我々20代、30代のフォローをしていただけたらなと思います。皆さん、皆、小学校、中学校と地域のことを勉強してきておまして、やはり郷土愛のほう、かなりあります。もう既に十分あるのではないかなと私は重々感じております。そんな中、生かせる場所が全然ないので、ぜひそういったところも検討して、今青年団がないというのも、昔の流れを引き継いでいる状態がありまして、今新しく体制をつくり直したり、そういった若者が集まったり、若者が集まって地域に貢献できるような流れがあるとかなり人が集まりますので、そういった流れも検討していただけたらなと思います。

○安田委員長

検討ではなくて、皆様方、どんなアクションプランをやっているのかという話もされたら。僕らはここまでやっているのですが、何かこれに対してサポートしてもらえませんかというような。

○谷上委員

そうですね。青年団に限らず、若者がそういった組める、地域に入っていけるような仕組みをぜひつくってもらいたい。その取っかかりとして青年団でもいいですし、そういった地域団体を育てるような仕組みをつくっていただきたいと思っ

ています。地域のフォローがかなりあると団体が育っていくのかなど、私が実施して思っております。地域が若者同士でつながりが強くなっていくと、やっぱり佐治のほう楽しいということで大阪から帰ってきたり、青年団同士で結婚がもう何組かできています。我々、佐治町のほうも、今16名おりますけれども、半分が鳥取市内、もしくは岩美のほうもおりまして、佐治のほうに上がって地域の役をしていると。それだけ地元で貢献できるような場所がないのだなと重々感じております。横のつながりもないので、横のつながりが若者同士の考えでつながっていけば、そういったにぎわいもできてくるのではないかなと、十分可能性はあると感じておりますので、ぜひお願いします。

○安田委員長

僕が例えば同じ立場だったら、僕ら、こんなにしてつくったのですが、これに対してバックアップしてもらえませんか、まずアクションを起こします。何とかしてくれというのは、実態ができてから、お願いします、何がない、お金がないのですというのを言いに行ったら、すぐに、そこまでやっておられるのですかということになって、もう何の抵抗もなくお金は幾らでもできると思うよ。実態ありき。まずつくりましょう。

○谷上委員

では、すごく簡単に、お金はそんなに要らないのですけれども、行政の方のすごいいろんなスキルを持っておられる方がおられるので、そのスキルを青年を育てるものにちょっとでも力を使っていたらいい流れをつくっていただきたいです。

○安田委員長

よろしいでしょうか。今彼らはやる気を起こしていますので、ぜひよろしく願いをします。

○森原委員

人づくりと地域づくりにも関することですけれども、今ちょっと懸念しているのが小・中学校、特に小学校の統廃合問題、文科省が基準を見直して、通学時間1時間以内ということになっているのですが、多分鳥取市内でもこれからこの問題は大きくクローズアップされてくると思います。

この総合戦略の中では入らないと思うのですけれども、やはり小学校が地域のコミュニティの核で、鳥取市内にも郡部には本当に10数人、数十人の小さな小規模校があるのですが、各地区いろいろ取材で訪れますと、やっぱり小学校、子供を巻き込んだ地域づくりが中心だと。もし廃校になってどこかと一緒になれば地域が衰退するなという大変懸念、心配する声をよく聞かれます。実際これまで廃校になった地域が衰退しているのはもうほぼ間違いないところで、そのあたり、市としてこの小学校の統廃合、小規模校をどうするかという方針を立てられたほうが僕はいいのではないかなと思います。意見です。

○尾室教育委員会事務局長

今まさしくその作業といいますか、進めておりまして、このたび、4月6日に第12期の校区審議会から中間まとめという形で、一定のエリアについて懸念され

る項目や検討課題の抽出、それから、今後想定される選択肢の一例とかが示されたところであります。

おっしゃるとおり、国も一定規模の学校についての統廃合を進めるという形で学校の統廃合の指針みたいなものを出したという事実はありますが、ただし、その中でも尊重されていますのが、十分に地域の意見を酌み取った上で学校の統廃合を検討してくださいというところなんです。本市においては、国の指針が出る前から、国の指針以上に取り組みを進めており、実際、今現在、御承知のとおり、用瀬中学校、佐治中、それを合わせた千代南とか、それから、今、上山委員のところまで進めておられます福部の幼小中一貫校とか、こういった形のもの全て地元の方たちのいろんな意見、これを最終的に尊重しながらまとめたものです。

本市におきまして、これから統廃合を進めるという一定のルールはありますが、あくまでも地元の方の意見を最大限尊重すると。そこには、地域のコミュニティの場としての学校と、やはりどうしても教育委員会といたしましては、子供にいい教育環境を提供するという使命もありますので、こういったものが両立できる、こういったものを条件にして、小規模校であっても、それをよしとするのであればそのまま存続させるという方向です。

ただ、先ほど申しましたように、校区審議会のほうでそのところの意見をまとめていただいていますので、これはことしの12月ぐらいに最終的にでき上がってまいりますので、そういったものを受けて、また今後鳥取市全体の校区のあり方について、教育委員会としても一定の方向をお示ししたいなと考えております。

○安田委員長

よろしいでしょうか。

それでは、第2の項目に移らせていただきたいと思います。「誰もが活躍できるしごとづくり」という点でございまして、①経済再生・成長産業、②地域資源を活用した産業全般の底上げ、③地域経済における人材還流と育成強化ということでもあります。この点に対して御意見をお伺いさせていただきます。棚田委員からよろしくをお願いします。

○棚田委員

私が今所属しているのが連合鳥取ですので、労働組合の視点と雇用創出の2つのほうから。確かに鳥取市、企業誘致のほうは大変頑張って声を出してやっておられるということがあるということと同時に、それに隠れてしまう元々あった鳥取の産業はどうなっているのかというところの検証。

例えば中小企業のいわゆる経営者の方にとって、さっき小学校の統廃合で地元の納得といいますか、そういうことがありましたが、そういったほうの納得はとれているのかなというのも一つ心配になっています。

というのが、働く者としては、やはり企業であるとか、会社であるとかが健康であるということ、これはすごく重要なことになってきます。その健康というのは、もちろん経営が健康ということもありますが、働く者も健康であるかどうかということも気にしていただきたいと思います。

ここから2点目に入ります。ここに書いてあるしごとづくりの項目、確かに本当

にこれを全部推進したら、これで鳥取市に出来ない人はいないのではないかと思うぐらいの魅力的なことが書いてありますが、私が今抱えている問題としては、元気な人、健康な人はこれでいいかもしれません。でも、ここからドロップアウトといいますか、体、健康を害するであるとか、精神疾患によって仕事を続けることができなくなる方、こういう人たちがそれでも再チャレンジできるようなセーフティーネットというの、この仕事づくりの区分に入るのではないかなと思うのです。

となると、そこについて鳥取市としてどこまでの支援ができるのか。これは労働組合が掲げている、生活しながら働くことができる環境、これはどういうことかなと。さっき女性の方のほうから育児のことが中心に出ましたが、やはりどうしても働く者の中では、育児と介護というのほどの職場に行っても女性が中心にかかわっていることが多くて、なかなか男性社員のほうが気づけないことかあります。また休んでいるのかという言葉が出てきているということも聞いたことがあります。これは、別に経営者が言うわけではありません。同僚が言っているのです。ここに問題があるのが、お互い本当に心に余裕がなくなっているのだなど。俺もえらいのだから、おまえ、もうちょっと頑張れやという感覚が、その介護であるとか、育児であるとか、御自分の病気であるとか、抱えておられる方にとっては、大変これは苦しい状況だということ、ちょっと意見になってしまいました。以上です

○安田委員長

大変重要なことだと思います。地場産業というのと誘致企業とのその関連、地場産業といいますが、誘致企業であって、経年すると地場産業になるのでありまして、そんな問題、それから、健常でない方が生活をしながら働く、このあたりどうでしょう。

○大田経済観光部長

鳥取市としても、今言われたように、企業誘致のほうは頑張っているわけですが、当然地元の企業にとってプラスになるような、これは産業の底上げも含めてです。やはり鳥取市のうち99%は中小企業ということと、小を入れれば地元の企業、何千社もありますので、やっぱりそこが元気になってもらうということは大事に考えています。あくまでも地元の方が新たなことをするとき、どうしても新聞とかに出ると、企業誘致だけぽんと大きな金額が出るのですが、地元の企業さんが何か新しい増資だとかされる場合は、そのラインを低くしてそれに支援、これからもそういうところで施設を大きくされるという企業もありますし、今までもありますが、そこに対する支援も充実しているところですし、進出される企業にとってもできるだけ地元産業とプラスになるようなところを今後特に誘致していきたいし、今週も2件、自動車関係と航空関係、を誘致してきたのですが、両会社も地元の企業と連携がとりたいということをおっしゃっていますので、そこらはまた経済団体と一緒にマッチングの機会とかも設けていきたいというのがあります。

吉兆庵でしたら、今着工しましたが、今度は農業と一緒に連携してやりたいと

ということで、全体的に産業が上がるような企業誘致という、あくまで企業誘致の1社がというよりも、全体、鳥取市の産業、企業が上がるような取り組みをしていきたいと考えています。

それから、働く方の元気、それも大変大事なことでして、女性の働く環境、ワーク・ライフ・バランス、ここら辺は鳥取市だけではありませんが、いろいろ連携しているということや、身障者の方の働く場、これも今ちょっと不足ぎみという、不足というか、雇用はたくさんしたいけれども、なかなか人がいないという状況も聞いているところです。そこら辺も産学官というか、労も含めて、いろいろ連携しながら取り組んでいきたいと思っています。

○小谷委員

砂像について、ちょっと前の新聞に記事で出ていたのですが、今、観光とかジオパークとか、そういうことで、私ども観光コンベンション協会が砂の美術館を運営して、そっちのほうに重きを置いているのですけれども、やはりこれは文化芸術という観点でのポテンシャルというのはあると思うし、後継者を養成する、あるいは輪を広げていく、それによって、例えば芸大の美術とか彫刻科、彫刻を専攻した人たちが何かを感じて、そして、鳥取に定住して、それでずっと食っていくことはできないかもしれないが、セカンドワークとして何かやって、仕事をしながらやっていくという意味があると思います。

そのあたりの砂像というものを、これはオンリーワンなので、生かした定着、定住、仕事づくり、まちづくりといったところをもう少し深掘りして考えられないかなと。例えば松本にはサイト・キネン・オーケストラというのがあって、小澤征爾が監督をしていて、毎年フェスティバルをやっている。

あるいは別府にはマルタ・アルゲリッチのフェスティバルがあってというふうに、その芸術というのはやっぱりオンリーワンで核になるところというのは、相当な集客力があるし、話題になる。そういったところに少し足を踏み込んでできないかなと。そういうことが結局どこにもない鳥取の仕事づくりにもなる、まちづくりにもなる、ひとづくりにもなる。外から定住で呼び込めるという、そういうことになるのかなということをちょっと御提案したいと思います。

それと同時に、やはりそのベースになる地元の小学校、中学生、小学生かな、たちに課外学習でもう少し砂遊びを、砂遊びといいますか、砂像づくりとか、そういった体験を広くやっていただきたいなど。今近隣の浜坂とか福部とかの小学校に限られているので、なかなか我々が声をかけてもそこまでというあれがあるので、ぜひ少し底上げといいますか、ポテンシャルアップみたいなことをしていただいて、あるいは、先ほど申し上げたような、アートを専門にしている方々から見れば、もう少しイノベーティブな何か像というもの、砂を使ったものというのをつくれる可能性もある。そういったところでの広い視点での生かし方ができないかなというのが一つです。

また、私どもの観光コンベンション協会では、コンベンションの誘致をして、それに対してある一定の金銭的な支援をしているのですけれども、ある大学のオーケストラがその助成金を使えないかというふうに尋ねてこられたのですが、それ

はいわゆる入場収入を取られるところだったので、申しわけないけれどもできませんとってお断りをしたことがございます。

オーケストラとかそういうものというのは非常にお金もかかるものであるし、コンベンションとはちょっと別の文化芸術という切り口で何かそういう支援ができないかなど。変な話ですけれども、鳥取に来るオーケストラですか、曲、演奏する曲というのは大体ありふれた曲が多くて、二、三回音合わせすればできるのですよね。それだけ本当はお金かからない。本格的なものと呼び込んで、頻度高く呼び込んでいくと、まちづくりにもあれしてくるし、うちからそういう支援をして、全体の主催者の費用というのは入場者に還元するということになれば、これはちゃんとお金が回っていくと思いますので、そういうようなところをちょっとぜひお考えいただけないかなということで、以上で終わります。

○尾崎副委員長

文化芸術ということで、音楽関係なのですが、県外の音大を出て帰ってきている子が何人かいるのですけれども、教員をやりながら自分の芸術活動をするというのは、相当無理な状況があります、鳥取では。

講師に出ている子の話を聞くと、特別支援学級をやりながら、ソプラノをやっているのですが、そういう子なんかでもやっぱりすぐさびついてしまうというか、そのあたりは鳥大の先生なんかも指摘されているところで、鳥取に質のいい芸術を提供しようと戻してきても、働く場所というか、そういう何か支援の体制がないというか、そういうことで結局何か県外に出ていってしまうというか、鳥取に帰ってきたけれども、定着しないという状況があります。

中学校や小学校の教員をやっているとまず無理です。中学校なんかでは、昨今9時、10時まで仕事をなさっていたりして、自分の芸術活動なんかができない状態。そういう関係で、教員しか枠がないので、何かそのあたりで、芸術関係で何かそういう支援があると、無理なのかもしれないですけれども。才能が流出してしまうというか、せっかく県で県知事賞みたいな、最優秀をとった子でもなかなか鳥取で活動できないという状態があるので、同じようなことだと思いうので、ということで、お願いしたいと思います。以上です。

○安田委員長

これはどうでしょうか。今、小谷委員の質問、それから特殊な技能を持っておられる方の話でありますけれども。

○大田経済観光部長

砂の美術館を担当しております経済観光部ですが、確かに砂の美術館も今8期目ということとなっていて、今まで、鳥取市としてはやっぱり観光にウエイトを大きくしているところがあります。確かに毎年50万人ぐらい来ていただけますから。その中で、今、小谷委員が言われたように、その美術、芸術としてどうしていくかという、こういう観点も少しずつふやしていくことが必要かなと思っています。それで、イベント的には子供たちにつくってもらったり、街なかで砂像をつくってみようとか、こういうことはありますが、まだ体系的になっていないということがありますので、これは教育委員会とも連携して、子供のどこかでイベン

トで何かつくるというのではなしに、美術の一つの過程としてこんなことができないかなというのがあります。

それから、人材育成としては、マイスターさんが今何人かおられて、つくっておられるのですが、そういうこともふやしていこうかなと考えています。今年も砂像プロデューサーというのを1人採用したのですが、それでも全国から何十人か来られて、そういう興味を持っておられる方もおられるということで、やっぱり砂像文化をどう定着していくかというのはこれからの課題で、それは観光コンベンション協会と一緒に取り組んでいきたいと思います。

それからもう1点、コンベンションビューローの関係の補助ですが、これは県、市で行ってしまして、大きな大会、ある程度人数が大きな大会で、県外から宿泊する方に対して補助するという制度ですが、確かに料金を取るイベントには出していないという現状があります。

ただ、言われるように、大きなイベントで鳥取市にとってもプラス、美術だとか、音楽だとか、そういうのはこれからの一つの検討課題かなと思っています。

○田中企画推進部長

尾崎副委員長がおっしゃった話ですが、個々に多分、文化芸術活動、エリアも違えば内容も違うということで、鳥取で活動されて、それで対価を得られて、生活できるということであればいいのしょうけれども、今おっしゃったような話が多々あるというのは理解できます。

では、未来永劫、そういった生活的な支援をするのかどうなのかというところが、芸術活動をやっておられる方が果たしてそんなことを欲しておられるのかどうかというのもあったりして、一つの検討課題であると思います。

アーティストを集めてきてそういった拠点をつくりたいというところは、これは県内、市のほうももしそういうことができればということは思っているのですが、その具体策というところは、今ここで即答できるようなことではないので、またこれは検討させていただければなと思っています。

○小野澤委員

私は金融機関なもので、基本的にはやはり民間ですから、ビジネスにつながる地方創生の施策について、一緒になって推進していきたいと思っています。

このしごとづくりの件では、やはり先ほど来出ています企業誘致、本当に市も県も頑張っていたきまして、航空産業、自動車産業でありましたし、今度はジェネリック医薬品業界も出てこられるということは非常に喜ばしいことですが、100名単位での社員を募集されるということですが、逆に本当に鳥取市でそれだけ集まるのかなという不安があります。

先ほど、田中企画推進部長から、環境大学、鳥取大学の地元の学生さんは2割弱であると。定住しようと思えば、その8割強の県外者の方をこういう企業へ就職していただきたいと。そういうPR活動も続けていただきたいですし、鳥取に来られた学生さんが帰っていく、定住につながらないというのは、やはり鳥取に魅力がないとか、そういうのがあると思います。

橋本常務さんもいらっしゃいますけれども、看護専門学校、200名以上の方

も入学していらっしゃるし、駅前のやっぱり活性化ということで、このまちづくり、下から2番目にありますが、中心市街地活性化、こういうものも一生懸命取り組んでいただきたいと思います。

例えばシネコンをつくったり、書店というのも、学生が多いということであればそういうものを、投資というのも必要だと思いますし、やはり鳥取といえば私は砂丘だと思っていますので、砂丘というのは年間200万人以上の観光客が来ると。先ほどありました砂の美術館であれば50万人、こういう観光客がいますので、やはり砂丘への投資というのも、新たなものをつくったりという投資というのも必要ではないかなと思っていますので、よろしくお願いいたします。

それと、農業も書いてあるのですが、農業、担い手等が少ないというのは、やはりもうからない、苦勞してももうからないというのがあるんですね。我々もアグリビジネスやろうと思って調べたりしていますけれども、本当に所得が低いというのがありますので、石破大臣も1次産業の再生ということを言っていると思いますが、鳥取市としてもこの農林水産物を活用した新商品の開発、ブランド化、どこまで本気で1次産業をやっていくのかということもちょっとお聞きしたいと思います。

○大田経済観光部長

企業誘致は順調には進んでいるのですが、やっぱり人材確保、人材をどう戻してくるかという、これが一番大きな課題だと思っています。今の誘致関係の契約、これからの契約でも1,800人ぐらいの人数になります。この一、二年、多分二、三年でも四、五百人の、これはほとんど正職のウエイトが高いような雇用がありますので、これを地元から外に出るのを地元にというのもありますが、いかに外から帰ってくるか。

これからは割としっかりした企業というのがありますから、そこら辺をふるさと定住機構と連携したり、市も補助制度等を検討しているのですが、外からどう呼んでくるかということ、これ県と一緒に今協議しています。県もちょっとその国からの経費もらった教育関係の事業もするというのもありますが、特にそこに一番力を入れていくところかなと考えております。

○井上農林水産部長

担い手の関係で御質問いただきまして、確かに普通にやっていると農業で飯が食えるというふうな状態にはなかなか難しいというのが現実です。

ただ、鳥取市では、平成19年から新規就農者を公募しまして、年間3人程度ということで、現在までに20数名の卒業生を出しています。中にはきちんと年間250万、あるいは300万の所得を上げているという卒業生もいますが、まだまだそれに満たない担い手もいらっしゃるのも事実です。それについては、県と協力しながら、経営のフォローアップを行って、改善をしていくというストーリーを実際に続けています。

鳥取の産物でブランド化されているものといったら、二十世紀梨とラッキョウということが皆さんの頭に浮かぶのではないかなと思いますが、現在JA、あるいは県と一緒に進めているのが、白ネギ、アスパラ、ブロッコリー、そう

いったものをつくることよって農業所得をふやしていこうという取り組みも実施をしています。

ということで、なかなかブランド化というのは一長一短には進みませんが、そういった中で、野菜の栽培であるとか、米については、昨年の26年産米が大変大きく下落したものですから、米の生産が伸び悩むのではないかなというふうに懸念していたわけですが、今年は昨年に引き続きまして、一昨年ですね、25年産米と26年産米が連続できぬむすめが食味ランキングで特Aのランクを受賞したということで、かなり農家でそちらのほうに移行していると。ただ、まだコシヒカリとの価格差があるものですから、その辺をどういうふうにアピールしていくかというのが今後の課題であろうと思っています。

○茶谷委員

実は先週、金、土、日と沖縄に行ってまいりました。その理由は、出生率がいいこと、また、経済成長率が他県に比べていいというところから、青年中央会の活動として沖縄県庁、また沖縄空港の視察をしてまいりました。

その中で感じたのは、沖縄は唯一のハブ空港と言われまして、千歳のタラバガニでしたら、買い物をして、翌日の朝にはもう香港に届くというスピードを持っております。その話を聞いたときに、鳥取でも海産物、ぜひ使えるのではないかと思います。その中で、御説明された方が、鳥取で来られた方は初めてですと。30数名で行ったのですが、ぜひ行政の方、来てくださいと言われておりましたので、お伝えしたいと思います。

また、感じたことが、やっぱり非常に外国人の方が多い。あと、これは自信を持って言えるのが、食べ物は絶対に鳥取のほうがおいしいと思いました。ですので、沖縄でもかなりの観光客、海外からもおられると思いますので、そのルートを鳥取にも持ってきたら、絶対に輸出、また、観光客を取り込む上ではかなりの仕事のつながり、また雇用につながるのではないかと思います。以上です。

○橋本委員

鳥取市医療看護専門学校の橋本です。

この4月、非常に収容定員200名のところへ大体1.3倍から1.4倍の競争率できちっと入学してくれました。その中の内訳を少し話しますと、90%が東部の学生ですね。10%のうち5%が県外から来られています。ですから、ひとつづくりの中では、魅力が出てくれば県外からも来るかなと、こう認識しております。

そして、200人中140名から150名が高校生、そして、50名ぐらい大卒が中心になってきます。40名の大卒の学科があるものですから、大学卒業してここへ入ってくるということは、地元の大学を出て、何か一つ資格を取りたい、または、東京、大阪に出て、また帰ってきて資格を取りたいという、ちょうど今、文部科学省が推進しています学び直し制度が何か動いているような感じがします。

初めての学生募集をしまして、学生の8割ぐらいはもう県内へ就職するというので、当初からの入学アンケート調査でも9割ぐらいいくかなと、こんなふうに考えています。あと、東部医師会の先生方ともまた連携しながら、看護師、さ

らにPT、OTの人、仮に県内で雇用が少ないときは、一旦大阪のほうへ出して、また戻してくると、こういうふうなスリーパターンぐらい用意しまして、人材育成に需要をつくって今動いている最中です。本当に鳥取市役所の方々、鳥取市民の方々、本当に協力していただきまして、出足がよかったなど本当に感謝しています。

もう一つは、鳥取市の方が誘致に来られて、今私のところに5つの市から、この地方創生と同じ、このパターンの学校をつくってほしいと言われて、次から次に市長さん来られるのですけれども、体力と気力がないものですから、もうここで勘弁してくださいということで、もう全部とめている最中です。

私も鳥取大学にいた期間、研究した期間がありましたので、愛情があったという面もあるかもしれませんが、今、隣の出雲も企業誘致もしていますけれども、地元が活性化するように御支援をしていきたいと。産業につながるような人材育成と、それで、地元で愛される学校、そして、幹部候補も将来は地元の人になっていくようにということで、今、人材育成も心がけています。皆さんの御協力をお願いしながら成長していきたいと思っておりますので、ひとつよろしくお願ひします。

○森委員

私のほうからは、安心して暮らせるまちづくりとひとづくりにも関係するのですが、鳥取で暮らしていこうと思うと、当然出産、子育てというのが大事になると思うのですが、やはり今医師会の産科の先生たちが高齢化しておられまして、5年先、10年先どうなるかわからないという状況で、鳥取市、それから医師会も含めまして、やっぱり産科医療を将来的に誘致していかないと、鳥取で安心して出産、子育てができなくなる可能性がありますので、その点もちょっと考慮していただいたらと思います。以上です。

○下田健康・子育て推進局長

現在、県のほうが医療政策のビジョンをつくっていますので、その中でまたそういう提案もしていきたいと思っております。御意見ありがとうございます。

○安田委員長

それでは、協議事項③今後のスケジュールについて。資料ナンバー3の説明に移りましょうか。今後の日程です。よろしくお願ひします。

○事務局説明（塩谷創生戦略室長）

資料に基づき説明（略）

○安田委員長

これに関連して御質問等ありますか。

大変短い時間の中で3つの重点テーマの協議をさせていただこうと思ったのですが、結局のところ3つ目ができなかったわけでありまして、次回にこれを重点的にさせていただいたらありがたいなど。次回は7月の予定ですよ。

○塩谷創生戦略室長

はい。

○安田委員長

ということでございます。以上をもちまして、これで終了させていただきます。
本日はどうもありがとうございました。